

特別寄稿



第十七代校長

山田 敏夫 先生

平成11.4.1～13.3.31

# 閉校を惜しんで

第十七代校長 山田敏夫

いよいよ北海道妹背牛商業高等学校にも閉校の時がやってきました。本校の閉校に当たり、永年にわたり高等学校教育に尽力多数の有為な人材の育成に努められ、地域社会発展に貢献された業績は誠に大なるものがあります。

顧みれば、戦後の教育改革の理念でもある教育の機会均等の精神を、高校教育に発足したものでありました。向学心に燃える勤労青少年や、諸般の事情で進学の断念を余儀なくされていた人たちにとって大きな教育改革でありました。一町村に一高校の設置が推進され、本校も全町あげて創立運動を展開し、本道初の新制高校定時制課程単置校として、昭和二十四年に地域の切なる願望により開校したものであります。爾来、五十九年間のあゆみは、仮校舎（小学校）から独立校舎への移転、普通科、農業科、家庭科の三学科から商業科への学科転換、道立移管、校名変更などの変遷を経ながら、歴代校長先生の卓越した教育理念と諸先生方の優れた教育実践、そして生徒の真摯な努力、地域の方々のご支援が今日の本校を築かれました。

本校の教育目標「正しい職業観を身につけ、勤労を尊び、実行力ある社会人を育成」も指導に十分生かされてきたものと思うのであります。「至誠」を校訓に掲げ、有能な職業人育成に尽力してきた同校の半世紀以上の素晴らしい歴史と伝統を絶やすことなく後世に継承すべくことを願っております。特に商業科という学科の特色を生かし、地域産業の発展に寄与できる人材の育成に力を注ぎ、その独得な教育の成果は広く認められてきたところであります。中でも特筆されるのはバレーボール部の活躍であります。五十三年の全国高等学校バレーボール選抜優勝大会で全国制覇を成し遂げました。その後も毎年のように全国大会に出場し準優勝等数々の好成績をあげ、一躍全国に妹背牛商業高校の名を響かせました。

私は平成十一年から二年間の短い期間でありましたが、本校に勤務する機会を得、五〇周年に巡り合い、記念式典・記念事業を協賛会長 猿倉久雄氏、PTA会長 鈴木正彦氏に大変お世話になりながら行えました事が、今更ながらなつかしい思い出と感謝の気持ちでいっぱいであります。

時代の情勢変化に伴い北海道妹背牛商業高等学校の使命を果たされ本日発展的に閉校されましたが一抔の寂りようを禁じ得ません。ここに永い間のご努力に敬意を表し今後益々地域の発展を祈念申し上げます。

## 特別寄稿



第十九代校長  
谷奥 憲夫 先生  
平成15.4.1～18.3.31

# 妹商高の素晴らしさや輝きを 忘れることなくいつまでも

第十九代校長 谷奥 憲夫

自分の勤務した学校の「閉校」は、誠に残念であります。出来ればこの事実を見たり聞いたりすることから逃げ出したい気持ちであります。校長として三年間お世話になり、学校と地域との連携や生徒・保護者・教職員との多くの出会い、想い出があります。今、薄れていた記憶がハッキリと甦って、楽しいことや辛い、苦しい出来事もあったことなど、当時のことを懐かしく思っています。

新任校長として赴任が決定し、三月二十五日頃に妹背牛町教育委員会主催の教育関係者歓迎会に出向き、町の理事者（加藤町長さん）、教育関係者と初顔合わせをすることになり、緊張と不安の中で公民館での歓迎会に出席させていただきました。その時、前任校長の石垣校長先生から「この忙しい時期に大変に申し訳ありません」の一言で、事情（妹背牛町からの学校支援）を理解しました。当時の私は、全国でも女子バレーボール部の活躍が有名な伝統校として、道内の誰もが知っている、全国優勝や準優勝、上位入賞実績のある学校の校長として赴任することの重大さに気付かず、新任校長となった喜びと職務に対する情熱や意欲、思索で頭が一杯でした。当時の妹商高は、特例二間口校で、この年の入学者が十一名と三〇名を割って間口減となり、学校存続の危機という重大な問題に直面していることが、赴任する直前に分かりました。学校を存続させることが校長としての私に与えられた役割（責任）であることを悟り、多くの問題や課題に意欲と努力、行動を持って当たる決意をしました。

学校存続のために何としても入学者三〇名前後を確保する事が必要不可欠であると考えました。生徒一人ひとりを大切にしたい学習活動支援の充実、入学者確保の方策を検討し、全教職員が共通理解のもと一丸となって取り組むことに協力的であったことは、大変嬉しく思っています。

これまでの伝統と実績の女子バレーボール部のある有名校を道教委が平成十五年度入学者十一名の数値結果のみで、単純に生徒募集停止とはしないだろうとの思惑で、積極的な学校経営の改善を進めることとしました。新年度に向けた教育計画の点検と見直し、学習指導の改善・工夫に真剣に取り組み、入学者三〇名前後を確保するため、重要課題である学校教育活動の充実とPRを積極的に行い地域の信頼を得ることに取り組みました。また、生徒や教職員の本校の教育活動に対する自信や誇りを持たせ「地域に信頼される、愛される学校づくり」への生徒・教職員一人ひとりの意識高揚を図ることを優先し、力を注ぎました。名門女子バレーボール部の復活のために選手募集では①バレーボールの好きな生徒②バレーボール競技をとおして心や技術、身体能力、忍耐力、人間関係面での精神力を磨き、大きく成長したいという生徒③高校三年間を若さと情熱で人間としてパワーアップして卒業後もバレーボール選手として活躍したい④全国大会に出場したいと意欲のある中学生を積極的に勧誘し、中学生や保護者に話し訴えかけたことにより、共感してくれた中学生が入学してくれたことは、大変に嬉しいことでした。

バレーボール部の顧問（平本監督、小澤コーチ、小島コーチ）それぞれの個性や魅力、熱意のもとに集まった生徒（選手）達が、立派に寮生活を続け、その真面目でひたむきな姿勢に、いつも元氣と勇氣、やる気をいただきました。

妹商高の素晴らしさや輝きを忘れることなくいつまでも、経験させていた多くのことを宝物に（大切）して、生涯の誇りとして行きたいと思います。妹商高はなくともこの学校で培（頑張）った経験と実績を忘れることなく、卒業生の皆様と妹商高に関係する皆様方の今後益々のご健康とご活躍、ご発展を心からご祈念申し上げます。